詩篇 123 篇

都上りの歌

1 **あなたに向かって、私は目を上げます。天の御座に着いておられる方よ。**
2 **ご覧ください。奴隷の目が主人の手に向けられ、女奴隷の目が女主人の手に向けられているように、私たちの目は私たちの神、主に向けられています。主が私たちをあわれまれるまで。**
3 **私たちをあわれんでください。主よ。私たちをあわれんでください。私たちはさげすみで、もういっぱいです。**
4 **私たちのたましいは、安逸をむさぼる者たちのあざけりと、高ぶる者たちのさげすみとで、もういっぱいです。**

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌
121 篇：巡礼の旅の歌
122 篇：エルサレム神殿到着の歌
<u>123-133 篇：祭で歌われる祈り</u>
134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

巡礼歌の一つに数え上げられる本篇は、内容的に見ると紀元前 586 年にバビロン捕囚で国土を失っていたユダヤの状況とよく合致しています。捕囚から解放された民は祖国に帰還しましたが、そこで先住民による虐げを経験しました。

- **ところが、ホロニ人サンバラト、アンモン人の僕トビヤ、アラブ人ゲシェムは、それを聞いて私たちを嘲り、蔑んで言った。「あなたがたがしているこのことは一体何だ。あなたがたは王に反逆しようとしているのか。」**（ネヘミヤ2:19）
- **私たちの神よ、お聞きください。私たちは辱められています。彼らのそしりを彼らの頭上に返し、捕囚の地で略奪を受けるようにしてください。彼らの過ちを覆わず、彼らの罪を御前から消し去らないでください。彼らは再建する人々を侮辱したのです。**（ネヘミヤ 3:36-37）

このような状況に照らして本篇を読んでみると、詩人の思いが痛く伝わってくるはずです。

本篇の中に出てくるキーワードを中心に読み解いてまいりましょう。まず「**目**」という語がよく出てきます。「**私は目を上げます**」（１節）、「**奴隷の目**」「**女奴隷の目**」「**私たちの目**」（２節）と、詩人の目の向かう方向が主であることが強調されています。私たちは「見える」ということが当たり前に生きていますが、肉体的には見えていても、物事の真相や真理は見えていないということがよくあります。人が表向きに言っていることが、実は裏の意味を伝えようとしていることもあります。この詩人が何度も「**あなたに向かって、私は目を上げます**」「**私たちの目は私たちの神、主に向けられています**」と繰り返すところには、神が見えなくなりそうな状況下にあって、どうにか

神を見出そう（信仰に立ち続けよう）としている必死さが窺えます。周囲の人間の力が強く、信仰を持って生きるところに無力さを感じるとき、私たちは神が見えなくなるのです。

２節で「**奴隷の目が主人の手に向けられ、女奴隷の目が女主人の手に向けられているように**」と言われていますが、これはおそらく、主人が指示を下したらいつでも行動できるように待っている奴隷の様子を伝えているのでしょう。主人の一挙手一投足を見逃すまいと、目を見張っている忠実なしもべ。そのように、神がどのような答えを下さるかと詩人は期待を持って待ち望んでいるのです。

次のキーワードは「あわれみ」です。「**主が私たちをあわれまれるまで**」（２節）、「**私たちをあわれんでください**」（３節）と、なかなか祈りに応えてくださらない神に向かって行動を求めています。敵対者の「**さげすみ**」（３節）と「**あざけり**」（４節）は耐え難いほどに民の心を苛立たせていました。「**もういっぱいです**」「**もういっぱいです**」（３、４節）と、これ以上聞きたくない思いを告げて、本篇は締めくくられてしまいます。神からの答えなきままに。

聖書が伝えているところによれば、捕囚後の神殿再建は神の不思議な介入によって実現していくことになります。一時中断された神殿再建事業は、ペルシャ王の指示を得て再び動き出し、その費用まで賄われていくのです。苦しみの渦中にあるとき、私たちには神の御顔が見えなくなるかもしれません。しかし、この詩人が神に食らいつき、目を見開いてその御業を見届けようとしたように、私たちも生ける神の働きを信じて祈り続けたいと思います。今何らかの苦しみを経験している人は、この詩人の姿勢から学ぶことができます。